二〇一二年七月二十八日
顧問　渡辺忠成先生　稽古会　講義録

【三学円之太刀】

〈一刀両段〉

◇　無形の時、足幅は十五～十八センチ程度ひらく。甲冑を着ている時は足を閉じることができない。むしろ、もっと開いているぐらいである。

◇　足を開く角度は両側に三十度ずつ。右足は半歩前に出た状態。両足をそろえるのは、神に祈る時のみ。足をそろえる姿勢は弱い

◇　無形から左足で間をぬすむ時に気を出す。ぬすむ時、十センチくらい沈む気持ちで行う。それでも二～三センチぐらいしか沈まない。打太刀は使太刀の後ろの壁と使太刀の頭を見て、どれだけ沈なる身になったかを確認する。

◇　ぬすむ時、左足のかかとを右足の親指の付け根の横に置く。左足の足先は前を向ける。

◇　車になったときは、太刀のみを四十五度回してから、太刀と足を同時に引く。後ろ足がつく時はつま先からついてはいけない。重心の安定の為に、かかとからつく。

◇　歩幅は肩幅が入るくらい開く。前足（左）を直線と考えて後足（右）は一二〇度ぐらいまでで止めておく。それ以上広げると、次の動作で前に向けない。前足のかかとの後ろに後ろ足のかかとがくる。教本で後ろ足のくるぶしがくる記載しているのは間違い。前足（左）の踵が後足（右）の土ふまずや踝（くるぶし）に来るという教えは厳長先生が取り上げ使いの場合、なかなか足の回転ができないので、踝ぐらいと教えておけば、かかとが来ると教えていたのをそのまま原稿にしたもの。

◇　取り上げ使いは、その後、雷刀に振りかぶる時、後ろ足を引きつけるので踝でも良い　が、内伝Ⅰ、Ⅱはかかとで回る為、前を向けない。

◇　合し打ちの時の間合は打太刀が合わせてやる。使太刀は打太刀の切先を見ておき、切先が上がったら使太刀も上げる。打太刀は、使太刀の体勢が整うまで待つ。内伝Ⅱでは使太刀が一歩出てくる分、手前三十センチ手前を大調子で打つこと。使太刀は小調子。たたき割るのでなく、抑え込むように打つ。

◇　合しは小手を抑える。柳生会のように拳と拳とはぶつからない。子供の時は、理解しやすいように頭へ打つことを教えるが、それがそのまま柳生会の教えになってしまっている。

〈斬釘截鉄〉

◇　使太刀の太刀が打太刀の右手を捉えるとき（触れたとき）左足が地面につく。これは合し打ちの場合も同様である。一足一刀といい、連続して打つ時は、ひざを上げて、打ちと足を一致させながら打つ。

◇　斬釘は打つのではなく、昔のかぎ状になった消防道具を使うように打太刀の手に引っかける。この時、左足が同時に地面につく。そして、引っかけた瞬間に体をカラリと回転させる。

◇　打太刀は、間境でお互い雷刀になった後、体の向きを変えてから一つの太刀を打つのではなく、打ちながら体の向きを変える。

◇　斬釘の後、取り上げの場合、打太刀が撥草に下がる時の後ろ足がついたら、使太刀は体の回転した分を戻して、打太刀の柄頭に自分の中心線を合わせ、雷刀になる。

〈半開半向〉

◇　使太刀は太刀の物打ちを打太刀の首につけ、打太刀が移動するのに伴い、首につけたまま太刀を動かす。手で動かすのではなく、体全体で動かす。

◇　取り上げの場合、打太刀は使太刀の小手を狙うので、小手に自分の体の中心線を合わすように、少しだけ向きを変える。

◇　使太刀の青岸に構えた前足（右）は取り上げ使い、内伝Ⅱ、内伝Ⅰの場合、打ち出すとき後ろに下げず、前に出す。（後ろに下げるのは本伝のくねりの時のみ）内伝Ⅱ・Ⅰの場合、攻める為に、前に出るようにしている。前足を出さなければ打太刀の小手に当たらない。

◇　取り上げの場合、打太刀は、使太刀から急に横から攻められるので、驚いて後足（左）を引いて雷刀になり、使太刀との間合いを整える。

◇　内伝Ⅱ・Ⅰの動きはくねりの一種。打太刀が撥草に構えたら、二の切りを行うのであるが、応用技として、天狗抄の善待の形に取り上げることもできる。この状態だと、打たなくても勝ち、勿論、打っても勝ちを得る。使太刀のレベルが上がれば少しずつ教える。

〈右旋左転〉

◇　文を切って、欠拍子を使う場合、太刀の鍔の直径が十センチ程度なので、太刀は打太刀の太刀の下、五センチまで下げれば裏を取れるが、ギリギリだと鍔に当たってしまうかもしれないので、十センチ下げる。

◇　使太刀が何度か文を切って、打太刀が拍子を合わせたという時に、欠拍子を行うので、打太刀は拍子が狂い「虚」になる。使太刀の拍子に打太刀が合わすのが基本であるが、逆もある。文を切る時は肘を前後に動かさない。

◇　文は呼吸。吸うときに上げ、吐く時に下ろす。動かすのは少しで良く、ゆっくりで良い。剣道でもセキレイの尾とか言って切先を振る流派があるが、それを大きくやっている。他流派は呼吸を合わせないで打ったりしているが、意味がない。いつまでも拍子を合わさないようにと教える人がいるが、それでは練習にならない。

◇　使太刀が文をきり、裏をとって四十五度に打太刀の首の頚動脈を切る時（取り上げ・内伝Ⅱ・Ⅰ）太刀の柄は左腰の帯通り。

◇　使太刀が裏をとって打太刀に三歩で攻めかける時、十センチ、二十センチ、三十センチと進んで行く。

◇　太刀は、取り上げ・内伝Ⅱは、一歩目は柄を帯通りのまま動かさない。二歩目で少し柄を上げ始め、三歩目で柄の位置をみぞおちの高さにする。内伝Ⅰは三歩とも帯通りのまま動かさない。

◇　順に変化して下がる時は、取り上げ使い、内伝Ⅱは、相手の対応に対して心の準備ができていないので、切先を重ねずにすっと下がる。内伝Ⅰの場合「三寸の付け（お互いの太刀が十センチ交差する）」を行い、使太刀は打つ気を出してからりと変わる。「虎穴に入らずんば虎児を得ず」の例えを使えば、「虎の子」は打太刀の小手。使太刀は太刀を重ねて、打太刀の虎児(小手)を得ようとしている。打太刀が、使太刀の太刀を斜め下に抑え込もうとしてくる場合は、使太刀は順に刀を返して下がっていく。打太刀が何もしてこなければ小手を打ってしまう。こういう駆け引きを稽古する。

◇　取り上げ、内伝Ⅱは下がる時、後ろ足(左足)を４５度の位置に一歩下げる。（元々、場の左斜め前に進んでいたので、四十五度下げると正面に対して真後ろに足がつくことになる。）そうすると、打太刀の太刀の外から打太刀の首が見える。その首に切先をつけながら、逆勢→順勢に切り替え、下がっていく。相手が攻めてこなければ、攻めていく。

◇　取り上げは文を切ってお互い雷刀になっ

た後、前足を斜め前に真直ぐ出して後ろ足を回転させながら、頭を打つ。

◇　内伝Ⅱ・Ⅰは、打太刀の方を向いて越した後、真直ぐ打つ気勢を見せて、相手が相架けで防いできたら、回り込んで小手を打てるようにする。

〈長短一味〉

◇　左足で間をぬすんで逆車に構えるときは、一刀両段よりもさらに沈む。自分を小さく見せることで相手から打たれやすい状態にすることが大切。天狗抄の「明身」も同じ理屈である。先に逆車に構え「先に打つぞ」という「先」を取る気構えが大切。

◇　内伝Ⅰでは打太刀との間合いが近いから合し打ちは「コチン」と打つだけ。肘を最初から最後まで曲げたまま小手を打つ。

〈二の斬り〉

◇　内伝は体の中心線で攻めていくので、回転が終わってから打つことになり、取り上げ使いよりも下から使いの方が使いやすい。（取り上げ使いは雷刀に上げて止まった所から、打ちと回転を同時にしなければならないので難しいるので動きづらい）

◇　打太刀の撥草の後ろ足がついたら、打太刀の撥草の柄へ使太刀が中心線に合わせ、その後回転しながら打つ。打った後、打太刀の両足の前に使太刀の両足がそれぞれくるようにする．（四足一線上の法則）

◇　下から使いは太刀を振り上げた時には体の回転が終わってなければならない。体を回転させる時、左足は踵を中心にして相手の方向を向ける。その後、右ひざを上げながら太刀を振り上げ、打つ。

◇　打太刀の撥草の太刀と対称の位置に仮想の筋を作り、その筋に打ち込む。太刀を置きにいくと同時に右足をつき、左足を引くと同時に刀も引く。左足を引くのはゆっくりで良い。

※　相雷刀八勢の疾雷刀で太刀先から動いている間は「二の斬り」もうまくできない。

◇　取り上げ使いの場合は、疾雷刀に回転が加わったもの。横から振るのではなく、雷刀から切先が直線的に目標に達するようにする。太刀を持たない場合は、右手で頭より高い位置で張り手をするイメージ。打ちと足を一致させる。

◇　足から動かない。足から動くと手打ちになる。手が動いてから、足が動く。連足。

◇　二の斬りの時は「内股」にならないこと。又、両足の間に竹刀が一本入るだけの間隔をとる。

◇　使太刀の両肩の間に打太刀を入れる。肩とは、腕の付け根の盛り上がった部分（体の中心に近い箇所）のことをいう。肩の外側に相手を置くと、二の斬りの時、相手から背中が見えてしまう。

◇　両肩の間の外でたとえ敵の胸倉をつかんだとしても動かない。肩と肩の間に敵を置いて、敵の肩の後ろを押すと崩せる。相手が手刀で横面打ちをしてきたら、よけて上記の技をかけると容易に崩せる。合気道ではこのようなことを教えなくなってしまった。

〈その他、口伝〉

◇　一刀両段（内伝Ⅱ・Ⅰ）で車から「合し打ち」に行く時は踵で回転する。踵は便利。どんなに重い体重も重心を安定させて回ることができる。つま先で回ると足の裏の皮がむけてくる。だから、前半分だけの履物を履く。つま先の足の指は地面とプラス・マイナス・ゼロの力で触れる。地面と足の間に紙一枚はさまったような感じにしておく。床に薄い紙を置いて、浮いているような感じにしておく必

要がある。もともと草履を履いていた時に、足の指が地面につかない所からきている。

◇　斬釘截鉄で使太刀が横雷刀に構えて、打太刀の打ちを迎える時、左手が打たれることも想定しておかなければならない。左手を攻撃された時は「和ト」「転打ち」を使う。転打ちは雷刀に戻さず、横雷刀からそのまま打つ。又は、太刀を回転させて体を沈めながら逆勢に打つ。又は「手引き」のようにくねって引き込み、突く。

※　石舟斎の時の「斬釘截鉄」は青岸から流して打太刀の右手を押さえに行った。（神妙剣）（極意）極意は低く折り敷くのみで斬釘と同じ。

◇　横雷刀は、青岸を上げた構え。昔は「向上の青岸」と呼んでいた。だから、右肘を相手に示す。

◇　くだきの方が簡単。難しい太刀の方から稽古させている。思いつくことは大体先人が考えている。知らない人は伝書を読んでいないだけ。

◇　本伝の「右転左転」で、江戸柳生は順勢で文を切っている時に使太刀が打太刀の右小手を打って逃げる。そこで、打太刀がこの野郎と「逆の猿廻」で打とうとするのを「逆の猿廻」で打つという稽古をしていた。太刀が変化している例。

◇　柳生宗矩は活人剣として広めていたが、活人刀が正しい。相手を働かせる。

◇　新陰流は「後の先」を取ると良く言われるが、「後の先」というのは無い。截合口伝書に「切って切られて切って勝つ」とあるが、「必ず先の先を取るからこそ、攻められても勝てる後の先が取れる」ことを理解しておかなければならない。構えは相手より少しでも先に構える。

◇　三学・相雷刀八勢でも「先に打つぞ」という気持ちが大切。これを「心の先を取る」という。だから、相手が反応する。相手が攻めてこなければ、自ら走っていって攻める。

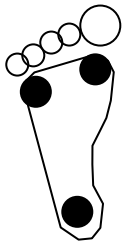
◇　太刀を遣う左右の手の役割は、左手で力を入れ、右手で刃筋をコントロールする。

◇　谷で太刀を止めるのは右手で行う。右手を握って止める。

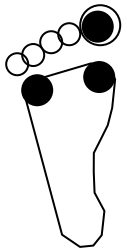
◇　「左手はかがめざること」伸ばすのと、伸びる、突っ張ると突き上げることは違う。肘を突っ張ると肘の関節が裏返り、肩の関節までロックしてしまう。肩の関節を殺さない。余裕を残して伸ばす。

◇　太刀を持つ時、握力を強めると肩が上がる。これは悪し。肩と肩の線と骨盤の線は常に水平。

◇　足の裏の三点で立つ。三角形は面を作るので安定する。



◇　天狗抄の「花車」はつま先の三角形で立つ。つま先を頂点に置き、珠が廻るようにくねり打つ。



◇　踵は浮かさない。二の斬りの時の後足（左足）の「土踏まず」は吸盤のように床に吸い付く。他流ではかかとに体重をかけていては前に動けないので、重心はつま先の方にかけ、踵は数ミリぐらいは浮かしても良いといわれていたものを、現代剣道は積極的にかかとを浮かしてしまっている。フットワークの為に変えてしまっているが、ダメなやり方。

◇　「無色の打ち」は、力まないで振りかぶり打つこと。普通に打つ時は力まない。打つ時に力むのはバカ。普通は振りかぶ

る時に力んでしまう。振りかぶる時に力まないでいると、打太刀は何かフラフラ～と上げたなあと感じ、対応できないまま打たれてしまう。

◇　振りかぶる時は息を吸い、打つ時は吐く。声を出すなら打つ拍子に合わせる。剣道で打ってもいないのに声を出しているのは威嚇しているのみ。レベルが低い。我々は声を出さなくても打てるように稽古する。

◇　新陰流の「陰」は孫子の「故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷霆。」

（故に其の疾きこと風の如く、其の徐（しずず）かなること林の如く、侵掠（しんりゃく）すること火の如く、動かざること山の如く、知りがたきこと陰の如く、動くこと雷霆（らいてい）の如し）の「難知如陰」から来ている。「疾雷刀」は「動如雷霆」から来ている。雷霆は稲光りのこと。

◇　厳長先生の本は、元の原稿にあれもこれもと追加して本にしているので、取り上げ使いから本伝がごっちゃになってしまっている。動きを文章で表現するのは難しい。あの本で理解できたらウルトラ天才。新しい太刀伝は基本の部分のみ記載するようにして今書いている。「正しい姿勢で技をかけられるようにしておけば」色々応用ができる。

顧問
（監　修）　渡辺　忠成
（作　成）　師範
上田　祐嗣
加藤　雅也
杉田　清麿